

「中国研修参加報告書」

京都大学文学部 1 年小笠原朋子

- (1) 私は教員免許を取得しようとしており、交換留学等を利用し最低就業年数内で卒業することと、教員免許を取得することの両立は難しいと感じていることから大学で留学することを計画しようとはあまり思っていませんでした。しかし今回の研修で文化、生活習慣等が異なる土地に飛び込むことに魅力を感じ、交換留学が不可能であっても長期休暇を利用した短期留学、またはインターンの経験を持ちたいと考えようになりました。
- (2) 研修中様々なものを目にすることができ、中国の飲食店の様子など普段あまり日本のメディアが伝えないものはもちろん、渡航前にインターネットの画像で見えていたはずのものでさえ大変新鮮でした。この渡航を通して、実際に現地に行くことによって得られる情報量の多さ、同時に普段何気なく日本で暮らしていて得られるその土地に関する情報量の少なさを感じました。また研修先では、わたしが中国語を話し、その内容を現地の人に理解してもらえたことが数回あり、話したのはほんの一言でしたが感動しました。しかし現地の人と話していることを何一つ理解できないということがほとんどで、音を重視して中国語を勉強することや日常生活で使う語彙を増やしていく必要性を改めて感じました。
- (3) 南京では、南京大学の大学院生の方にガイドをしていただき、食料品市場や南京郊外の住居、南京大学など個人の観光旅行では行かないような所にも見学に行くことができました。また、見学先の場所で中国の人々の生活の様子なども見ることができました。それに加えて、中国における様々な制度や格差について知りました。
- (4) この研修では前述のように、海外に身を置くことは魅力的であると思いました。しかし、海外で仕事をするということを安易に考えてはならないとも思いました。そのように考える一因として、この短期間の研修でも、日本と中国の間の生活習慣や考え方などの違いをやはり感じたということがあります。海外に赴任して仕事をするにせよ、日本の会社で海外の人々を相手に仕事をするにせよ、母国とは多くの異なる点を持つ国での仕事を成功させることは容易ではないと思いました。しかし、それでも私は海外での仕事に魅力を感じますし、むしろ海外で仕事をするものの困難さを学部の一回生の内に少しでも感じたという経験を将来の海外経験や大学での勉強において良い方向働かせたいと考えています。